

学生の意識変容と保育園における教育参加との関連

帝京短期大学こども教育学科

佐島 群巳 原田涼子 溝口 綾子

大澤 正子 伊藤 能之

Relation of education participation in nursery school to change in the student consciousness

Tomomi SAJIMA・Ryoko HARADA・Ayako MIZOGUTI

Masako OSAWA・Yoshiyuki ITOU

[キーワード] 教育参加 自己課題 意識変容 保育実践指導
[Key Word] education participation self issue change of consciousness guidance practice of nursery school

1 研究動機

帝京短期大学(以下「本学」という)は、平成19年度から保育士、幼稚園教諭の二つの免許取得できる「こども教育学科(以下「こども教育コース」という)」を開設した。本報告は、主として保育士養成の一環としての「教育参加」の事例研究を提示するものである。従って、保育士を目指す学生にとって保育園での保育実践場面で観察・調査・体験することは、学生にとって、極めて重要な学習の機会であり、僅か一日教育参加という限られた時間内で、保育園の実態を知り、保育についての認識を深めることができる、と考えたからである。

こども教育コースの一年次学生に「一日教育参加」を表1に示す教育参加実践指導プログラムに従って実施した。学生は、保育園において0歳児から5歳児の子どもたちとの初発の出会いとふれ合いをするわけである。学生は「一日教育参加」の事前指導を繰り返し受けながら、保育園における子どもの動き、教師と子どもとのかかわり方などについて関心と理解を深めることができると考えた。

「一日教育参加」は、学生にとって保育実習、幼稚園教育実習への課題を見つけたり、子どものかかわり方について気づいたりして実習への内発的動機付け

を図るのに有効であると考え、一年次学生に実施するものである。

「一日教育参加」によって、こども教育学科の一年次学生は、保育士を目指して教育参加への課題を明確に捉えるとともに、教育参加することによって保育の二つの機能(養護・教育)に関心と認識を深め、意識的、意欲的に大学における学習と研究に取り組むことを期待できる、と考えた。

私共は、かつて養護教諭養成コースにおける「教育参加」について考察し報告をしたことがある。(1)(2)

2 研究の目的

- (1) こども教育コースの学生は、どのような問題意識を持って、どのように「一日教育参加」をしたか、さらに保育士への意識・自覚を持つことができるかを明らかにする。
- (2) こども教育コースの学生は、「一日教育参加」を通して何を学び、今後、大学において何をどのように学んでいきたいか、学生の意識変容の様態を明らかにする。

3 研究の方法

- (1) 「一日教育参加」の事前・事後指導によって学生は、どのような意識変容をしたかを学生のノート・

アンケートなどを分析・考察する。

- (2) 「一日教育参加」を通して、将来の保育士への目的意識を持つことができるかを日誌、レポートの記述内容を分析・検討する。

4 研究成果

(1) 教育参加の実践指導プログラム

表-1は、こども教育コースの「教育参加」の実践指導プログラムである。この実践指導プログラムは、学生の教育参加を通して保育に対する意識変容の様態を評価できるように設計したものである。

表-1の①②③④は、教育参加の事前指導に当たる。

④は、教育参加の直前指導であたり、「教育参加の心構え」や「子どもの見方・とらえ方」について講じると共に、教育参加についての自己課題を明確にして実地に臨むようにした。⑤⑥⑦⑧は、教育参加の事後指導に当たる。事後指導では、実習園ごとに教育参加の成果について「学んだことを話し合い」グループ代表がまとめて発表する。

その後、教育参加で学んだことを各自レポートにして提出する(9月10日)。このレポートは、教育参加の実践的効果を検討するのに有効であろう、と推測したのである。また、教育参加の日誌をも提出させ、その記述内容の解析をすることになる。

表-1 保育園「教育参加」実践指導プログラム

実施日	指導事項
6月7日	①「こども教育コースを選んだ理由」—イメージ化(表2参照)
8月23日	②9月の「一日教育参加」に向けて、あなたは、「何を見てくるか」「子どもとどう関るか」など自己課題を設定する。(表-4参照) ③「一日教育参加」に向けて基本的な取り組みについて考えをのべる。 例えば 1)子どもの発達—0歳から5歳の心理的・社会的成長 2)子どもとの対応—信頼性を高めるために ・子どもの目線で ・微笑(表情豊かに) 3)記録をとり、コメントをつける
9月3日	④保育園「一日教育参加」の直前指導—自己課題と課題選定の理由(表-5参照) 1)保育実習の心構え(保育園の一日「教育参加」に向けて準備すること) 2)乳幼児の発達と保育(0歳児から5歳児までの発達の特性) 3)「自己課題」をめぐってグループで話し合い、その結果を発表する 4)「部分保育」の指導について
9月4日	保育園「一日教育参加」(前組)実施—5保育園(27名)
9月5日	保育園「一日教育参加」(後組)実施—4保育園(23名)(不参加 10名)
9月6日	⑤保育園「一日教育参加」事後指導 1)年齢差による(子どもの動き) 2)年齢差に対応する「保育士の子どもへの援助の仕方」 3)一日教育参加を手がかりに「大学での学習と研究」の在り方を考える 4)一日教育参加で学んだことをめぐって話し合い、自ら保育士への意識、意欲など「自己確認」をする—KJ法による「一日教育参加で学んだこと」「さらに大学での学習と研究の在り方を問う」の2点に即してグループでまとめる —(仲間と話し合い、作業し合いながら保育士へのあり方の自己確認) —実際の活動は後日行う ⑥課題研究『保育園「一日教育参加」で学んだこと』を題してレポートをまとめる(レポート提出—9月14日) ⑦日誌『教育参加で学んだこと』(表-6参照) ⑧日誌をボーペンで書くよう指示し、消書きさせる(全員再提出させる)

表-2 子ども教育コースを選んだ理由

(60名)

分析視点	具体的反応例	頻度数 (%)
子どもが好き	・子どもが好き、子どもが可愛い、子どもの面倒を見るのが好き ・子どものしぐさ、行動に対してすごく興味を持った (0歳児—2歳児)	36 (62) 2
二つの免許取得	・資格を取ってそれを活かしていきたい (保育士・幼稚園教諭の二つの免許を取れるのが魅力を持つ)	21 (35)
保育士・幼稚園の教師になりたい	・幼稚園時代から幼稚園の先生になりたかった。幼稚園の先生は大好き ・高校の先生に進められた ・ホームページで調べて帝京短期大学で資格を取ることが分かったから ・となりの「めぐみ幼稚園で実践力を身につけられる」ことが分かった	8 3 (28) 3
主体的選択	・子どもの成長を左右するのは保育園や幼稚園だと思う(子どもが変わることに関りたい) ・保育園・幼稚園の先生になりたい。なんとしても、ちゃんと勉強していい先生になりたい—必要な知識を得たい、人格を磨きたい、自分の意思で選んだ	2 11 (22)
家族から	・祖母の手伝い(茶道)で礼儀や作法を習い実践を積んで園児に対応したい ・親や子どものケアできる人になりたい(乳児園、特別養護施設で働きたい) ・親のいない子どもの世話をしたい	2 (12) 5
得意科目	ピアノや絵が得意だから	4 (6)

(2) 事前指導における学生に「教育参加」への意識の様態

① こども教育学科を選んだ理由

入学当初学生に「こども教育学科」をなぜ選んだか、を問うたのは、学生のこども教育コースへの関心度・目的意識を明らかにするためである。そこで、「あなたは、子ども教育コースを選んだわけについて、その問いに答えてもらった結果は、表-2の通りである。

こども教育コースを選んだ理由の中で最も多いのは、「子どもが好き、子どもの面倒を見るのが好き、子どもの行動を見るのが興味を持っている (62%)」ということである。

しかし、唯単に、子どもが好きだから保育士を希望するという発想だけでは、真の保育士になれないのである。この段階の学生にとって、このこども教育コースの学生の教育参加の関心度、目的意識の様態を把握することは、保育士を目指す学生の指導の一つの手がかりが得られるだろう。この学生の意識は、今後、何を契機にどのように変わっていくか興味ある視点でもある。

次に多いものは、「こども教育コース」に「保育士」と「幼稚園教諭」の二つの免許が取得できる (35%) ということに魅力を感じたからである。3番目に上げたことは、以前から保育士や幼稚園の先生を目指していたということである。この学生の意識は、何を契機に

自己実現のめあてに変わるか、追跡観察していきたい点である。

中でも注目すべきことは、「子どもの成長に関する仕事をしたい (28%)」さらに、「ちゃんと勉強していい先生になりたい (18%)」という強い主体的、意志力のよってこども教育コースを選定しているものがあることである。

② 教育参加に向けての意欲

教育参加に向けてこども教育コースの学生は、どのような問題意識をもち学習や研究への意欲があるかを明らかにするため「あなたは教育参加に向けて、どんな資料・情報を得たいか」を問うた。その結果は表-3の通りである。(次ページへ)

学生は、普段メール情報に馴れ親しんでいるにもかかわらず、無機質な資料でなく「人間とかかわり」から生きた資料・情報を得たいというものが93%もいるのである。次に多いのが、かれらの得意なインターネットの活用だ。

頻度数が少ないが「自分で調べたり、疑問を持ったりして、集めた資料・情報をいかす」「大学で学んだことを生かしたい」という極めて主体的な教育研究の接近性が見られたことである。これは、望ましい学びの姿勢であり、今後、これらの学生たちの意識の持続性をみたい。

③ 教育参加に対する「自己課題」

9月4、5日は、学生にとって初発の、保育園

表-3 教育参加への意欲化

(頻度数) 60名中

分析視点	具体的反応例	頻度数	%
人間とのか かわり	・先生や友人から両親・先輩から情報を得たい	27	93
	・授業から学びたい	16	
	・自分の兄や幼稚園の先生から学びたい、また、実際に見学しながら学びたい	12	
	・子どもと関ったり、遊んだり、教えたりして子どもの反応を見る	1	
情報操作に よる	・パソコンやネットによって調べる	22	58
	・図書館で調べる	11	
	・テレビで調べる	2	
どのように 資料・情報 を実習に活 かすか(実 習への目的 化)	・自分で調べたり、疑問を持ったりして、集めた情報を実習に活かす	6	50
	・遊びは室内・屋外で体を動かすことに活かす	2	
	・折り紙や紙芝居、手遊び、歌を授業に活かす	3	
	・ボランティアに活かす	1	
	・高校での体験を活かしたい	1	
	・情報をむだにしない	2	
	・子どもの立場に立って助けたり、柔軟に対応したりしたい	3	
	・実習園で、「よく学んでいるな、よく分かっているな」といわれるようにしたい	3	
	・学んだことを実習に、将来にも活かし、教育参加の事前指導をしっかり学びたい	3	

表-4 保育園「一日教育参加」において学びたいこと (頻度数) 60名中

分析視点	具体的反応例	頻度数	%
保育者のあり 方	・子どもとの接し方、かかわり方、しかり方、説得の仕方	19	73
	・援助の仕方(保育者の動き、保育の一日の流れの中で)	12	
	・喧嘩している子、泣いている子、機嫌の悪い子、話すことができない子などへの対応	12	
	・親との接し方	1	
園児の様子	・0歳児から5歳児までの生活の様子(動作、言葉つかいの違い、特に0歳児の行動)	14	47
	・どんな遊びをするか、どんな歌を歌うか、園児の遊び方・感じ方、長時間の園内の子ども様子、子ども同士の人間関係	14	
保育の方法	・遊び方、絵本の取り扱い方・読み方、何事に対しても興味の持たせ方仕事への集中のさせ方	9	32
	・年齢の違いによる遊び方、遊びの補助の仕方	8	
	・午睡の仕方、ミルクの飲ませ方、おなかのすいた時の対応	6	
自己対象化	・自分で足りないことを発見したい、信頼されるようにしたい、教師の行動は子どもたちに何を身につけたいのかを学びたい	4	6
その他	・幼稚園と保育園との違い	4	8
	・どのような行事があるのか	1	

「一日教育参加」である。

そこで、「保育園『一日教育参加』において学びたいこと(自己課題)はなにか」について問う。それに答えてもらったものを分類したのが表-4である。

表-4から分かることは、保育者のあり方である。例えば、「子どもとの接し方、かかわり方、しかり方、説

得のしかた」など保育士の子どもへの援助の仕方にも多くの関心を寄せている(73%)。次いで多いのは、園児への関心である。例えば、0歳児から5歳児までの生活の様子、動作、言葉の発し方、言葉の習得の様子に関心を示している(47%)。これは、子どもの身体的・心理的・社会的発達に考慮した対応の仕方への関

表-5 教育参加に向けての「自己課題」と「課題選定の理由」 50名中

分析視点	頻度数(%)	課題選定理由の典型例 (そのまま)
○子どもとの関り方 ・子どもの理解の仕方 ・保育士と子どもとの関り方 ・子どもとのコミュニケーションの仕方	37 (78)	・1・2歳児には、人見知りの子どもが多いので、そのような子どもにどのように接し、どうすれば信頼する仲間になれるかを学びたい(KM) ・帝京めぐみ幼稚園(大学に隣接する幼稚園)に実習した時に、片づけのとき、子どもが片付けてくれないので困っていました。また、子どもたちがわがママを言った時に、この場合は、今回の(教育参加)でも同じ状況になると思います。この機会にしっかり学び、次の学習に生かしていきたいと思ったのでこの課題を選びました。(KY)
○子どもの発達的特性 ・0歳児から5歳児までの心理的特性 ・3歳児の遊びの様子 ・年齢に応じた発達の様子	20 (22)	・幼稚園と違って保育園は、6段階(0歳児から5歳児)の成長過程を任される場所である。これは、子どもの成長をはっきり身体で実感することであり、変化に富んでいる。その変化に対応できる力を身につける目的でこの課題にした。
○一日の生活 ・子どもの一日の生活の流れ ・遊びなどの生活面、子どもの動き	20 (22)	・保育園の一日の流れを知りたいと思ったからです。また、仕事の内容を学んで、子どもに関りあいの中でよいと思ったところを取り入れたいからです。—知識を深めたい(MM)
○保育士の仕事 ・子どもに伝えたいことば— わかってあげられるか ・先生の働く様子、訪問者への対応	11 (22)	・言葉をうまく伝えられない乳児にしてほしいこと、したいこと(まだ全く聞いていないので)どれだけ難しいか、どういうことを伝えたいのか、を見たい。まずは、たくさん接することからなれてわかってあげられたらいいなと思ったから。(KO) ・日常でも起こることだし、けんかなどを処理していくことは基本的なことだと思ったからです。だからこそ間違った指導をしないように先生から学びたいと思ったからです。そこで学んだことをこれからの実践に生かしていきたい。
○幼稚園と保育園の違い	3 (6)	・0歳児—2歳児まで幼稚園では見られない。園児たち(保育園)の生活の様子を知りたかった。全体でも保育園にしかない時間帯の様子などの幼稚園と違った保育園の良さを学びたいと思いました。園児たちと先生とのコミュニケーションのとり方などを中心にどう関わっているかききたいです。成長発達を見てきたいです。
○子どもを捉える視点 ・子どもの目線を考えて保育士を目指す	3 (6)	・まだ、半年もたっていませんが、私は帝京短期大学にきて保育に関する様々な知識を身に付けてきました。しかし、それは、机上の知識でしかなく、現場で必要な知識を身に付けたわけではありません。現場の知識は誰かに教えてもらうのではなく、自分で身の付けるしかないとおもいます。この機会に現場の先生方の動きを見て学びたいと思いました。

心を示しているのである。

また、保育についての技能としての「園児との遊び方、絵本の読み聞かせ方」にも着目しているのである。その中でも将来の保育士としての自己存在、生き方についての課題意識があるが、今、彼らは、どう行動しているかが少しも見えていないのが、気になる場所である。学生の「信頼されるように学びたい、自分の足りないことを発見したい」という課題意識は、素晴らしいことである。これらの意識は、教育参加という実践活動への学生の期待から発せられたものである。入学当初のこども教育コース選択の動機(表-2)や教育参加への意欲化(表-3)の調査と比較してみると明らかに学生の意識変容の様態が分かるのである。学生のこの課題意識は、今後、大学における日々の学習と研究に生かされるであろうことを期待してやまないものである。

学生に保育園教育参加の直前指導(9月3日)において「自己課題とその課題選定の理由」を書いてもらった。学生は、翌日(9月4日)、翌々日(9月5日)に迫った保育園教育参加の不安や戸惑いを持ちながらも、課題とその理由を書いた。それら学生の反応を分析カテゴリーに照応しながら分類・集約したものが表-5である。

既に、「一日教育参加において学びたいこと(自己課題)-19、6、2調査」(表-4参照)を書いたものがある。この表-4と比べて見ると「教育参加直前指導(19、6、3調査)」における学生の問題意識や目的意識は切実感を持つようになる。

即ち、最も多い自己課題は「子どもとの関り方(78%)」である。その中でKMは、「どう子どもたちとコミュニケーションをとるか、どのように信頼しあう関り方をしていくか」など、翌日に迫る教育参加への不安ともつかない課題意識を持っていたのである。KY

は、本学に隣接されている幼稚園で体験したつまずき「片付けのできない子への対応」をどう克服援助できるか、という課題を明確に持って参加しようとしているのである。

次に多い自己課題は「保育士の仕事ぶり(28%)」である。これとほぼ同率の自己課題を設定したものが、「子どもの発達の特性(22%)」と保育園の「一日の流れ(22%)」を知りたい、ということである。この中でも「子どもの発達の特性」に関心を示しているものの、学生にとって子どもの発達について十分な理解をしているとは考えられないのである。従って、このことの関する授業科目、例えば、「乳幼児発達心理学」「幼児教育心理学」を事前に学習させる必要がある、と考える。特に、保育実習においては、身体的にも、精神的にも未熟な状態にあり、大人や保育士の保護、養護を必要とする時期の0歳児から、快活に飛び回り、仲間との意思疎通を図り、相手の話すことがわかり、心身の発達の著しい5歳児に至るまでの多様な子どもとの関わり方に戸惑いながらも、対応していかなければならないのが現実の保育実習である。そのためには、「保育所保育指針」に目を通して、乳幼児の発達の様子についての基本をとらえて、実習に臨んでほしいものである。

(3) 事後指導における学生の保育「教育参加」に対する意識

① 一日教育参加で学んだこと

保育園「一日教育参加」は、朝8:00から夕方17:00まで、文字通り長時間勤務である。教育参加は、東京都渋谷区の9保育園に依頼して実施した。それぞれの園には、5、6名の学生を配属する。

幼稚園教育参加は、子どもの活動状況の観察を中心とする。保育園教育参加では、唯、傍観者のような観察・記録することは避けなければならない。保育園では、直接園児と触れ合う中で、観察したことを、記憶に留めておき、その活動の後に記録することである。

また、既に、述べたように学生は、予め教育参加における自己課題を設定し、さらに、園長先生や担任の先生に尋ねたい質問事項を用意させた。即ち学生は、Q and Aを作成し、それに基づいて効果的な質問をすることができるのである。

一日教育参加の日誌(注)は、次のような様式で記録させた。

- 1 自己課題
- 2 担当したところ
- 3 教育参加で気づいたこと(見出しをつけて文を書く)

- ①記録しておくこと(関った子、環境づくり等)
- ②観察して気づいたこと(遊び、午睡、食事等)
- ③子どもとの対応
- ④園長先生に尋ねたこと

4 教育参加から学んだこと(表-6 参照)

(注) 日誌の書き方

①話し言葉 —— 22名

②書き言葉 —— 18名

繰り返し日誌は、「書き言葉で書く」ことを指導し、清書させて再提出させる。

表-6のように、保育園「教育参加」で学んだことは、かつて、アンケートした「保育園教育参加で学びたいこと(表-4)」の反応例の多い「保育士のあり方(73%)」、「教育参加における自己課題と課題選択理由(表-5)」の反応例の多い「子どもとの関わり方(78%)」とほぼ共通な視点で保育園教育参加に臨んでいることが分かる。

しかし、一日教育参加で学んだことは、視点は共通であっても、質が異なる学生の反応がみられるのである。即ち表-6の子どもの発達の特性については、「保育指針で学んだこととよく似た子どもの様態を確認できて驚いた」と事前指導で学んだことを教育参加の場で確認しているのである。また、それぞれ、限られた僅かな時間に学生の観察力で子どもの動きを捉えているのである。例えば2歳児は、色々なものに関心をしめしたり、物を占有したり、動き回ったりして遊ぶ、自己主張したりすることを捉えている。また、3歳児は、「わるふざけ」「言う事を聞かない」など自己主張、自己意識の発達の兆候を見取っているのである。4歳児は、「元気が取り柄」と学生が捉えているように、活動の巧みさの中にも他人を意識している活動をしている子どもをとらえているのである。学生は、そのような子どもから「元気をもらっている」「子どものパワーに負けられないような体力をつけなければならない」と日誌に記している者がいる。

Dの自己対象化について述べることにする。

自己対象化とは、課題意識や学習意欲から発せられた課題追求を持続的に自己と対象とを関わらせたり、他人事でなく自分自身のこととして対象に関わらせたりして、自己発見や自己確認を図ることをいうのである。

学生は、教育参加において、子どもの動きから「自分は保育士を目指すものとしてどう子どもたちにふるまったり、かかわったりしていったらよいか」「大学での学びの場をどのような教育参加から自分を生かして、自分を変えていくか」などの疑問をもって、自己変革・自己実現への自覚と生きる方向性を自ら確かめて

表—6 教育参加で学んだこと

分析視点	具体的事例	頻度数	%
A 保育士の仕事	・想像以上に大変で幅広く、内容がある仕事がある(子どもの世話、環境づくり、準備、片付けなどを含めて裏作業)	10	78
	・保育士は、体力がいる、全体への心配り、信頼され尊敬される仕事	11	
	・一生懸命やれば報いられる仕事	1	
	・0歳児の泣く子(だっこ、歌を歌うなど)	2	
	・オムツ、ミルクをやるときスキンシップを取りながら行う。簡単な仕事ではない	1	
	・保育園の流れが分かった	4	
	・食事の時は、一遍に3人の子を同時に食べさせる(拒否する子、眠くなる子、食べない子に無理しても食べさせる一健康を考えるから)	1	
	B 指導・支援の仕方	・いうことを聞かない子には、「ほめたり、怒ったり=怒るときにはしっかり言葉かけをしながら、わがままな子には説得しながら」	
・保育士は一人ひとりの子の成長に目を向け、支える役割、温かく見守ること		5	
・コミュニケーションの仕方		3	
・紙芝居の読み聞かせ一登場人物になりきる		2	
・なんでも子どもに実際にやらせる(食事は途中から手伝う)		3	
・一人で本を読んでいたら(先生が見守る)一興味が出たら仲間に入れてあげる		1	
C 発達の特性		・0歳児の発達の速さを実感した(音のほうへハイハイ、自分で遊ぶ一その様子を見る保育士の視野の広さ)	4
	・1歳児はやることがわかり行動する言葉を喋らない	3	
	・2歳児の発達を見ると「自己主張、興味関心、動き回る一遊ぶ、物を占有しようとする」	2	
	・3歳児は自意識ができて「悪ふざけ」をしたり、言う事を聞かなかったりする	4	
	・4歳児は元気が取り柄(活気、体力)	2	
	・難しい言葉を知っている子もいる	1	
	・保育指針で学んだこととよく似ていた(事前指導)ので驚いた	1	
	・悪いことをした後すぐ謝っている園児がいた	1	
	・子どもは一回覚えたことを繰り返し行う(援助)	1	
D 自己対象化	・たくさん刺激を受けて一日のうちに自分は成長した(大学ではない新しい発想ができた)	2	30
	・たいへんやりがいのある仕事(幼稚園教諭か、保育士か、迷っている)	3	
	・信頼感を得られるように精神的な能力を身に付けていきたい	2	
	・子どものパワーに負けないくらいの体力をつけたい	1	
	・実習時は何でもできるように普段から生活を変えよう	2	
	・臨機応変にどの子どもにも対応できる保育士になれるようたくさんの状況を学びたい	1	
	・雑用と言わず大事な仕事と思ってやるのが保育士の基本だ	1	
E その他	・1週間目に入る実習生は慣れて落ち着いて対応していた(他大学生)	1	13
	・保育士として活かせる得意なものを持つ	1	
	・先生の実践の姿を目に焼き付けてある	1	
	・明るく元気で遊んだこと、視線を合わせて話し合ったこと一褒められた	1	
	・エプロンは明るいほうがいい	1	

いるのである。

初めての一教育参加は、学生にとって、本来の保育士としての在り方を学び、生きる実感を与え、学びと生き方の指針を与えてくれたものとして、極めて意義のあるものであった、といえる。この僅かな一教育参加であったが、すべての学生は、緊張感のうちに、充実した一日を過ごすことができた、と考える。

例えば、表—6にあるように、保育参加は、次のような保育士を目指そうとする学生の意識の醸成をもたらしたものと考える。

- ・ 一教育参加で自分は成長した
- ・ 保育はやりがいのある仕事だ
- ・ 今後は、子どもに負けない体力、信頼感を得る精神的能力(やさしさ、思いやりなど)を身に付けたい
- ・ いやな雑用も大切な仕事と考えることだ

これらの反応例から見ただけでも一教育参加は、繰り返し述べてきたように、学生にとってこれからの大学での学びと生き方への大きなエネルギーを与えてくれたものといわなければならない。

(3) 保育園「一日教育参加」で学んだこと

一日教育参加の終了後、事後指導を行った。そこでは、次の二点から教育参加について振り返ることにした。

- ① 教育参加は自分たちにとってどのような意味があったかをグループ(以下「GW」という)で話し合う
- ② 「保育園『一日教育参加』で学んだこと」についてレポートする

① 事後指導の話し合いから

- ① については、実習園にいっしょに参加した仲間5名または6名による話し合いをした。その話し合いの結果GW代表が、全体会で発表する。そのGWの発表後のAKのノートを紹介することにする。

○ 自己の課題をめぐる話し合い

個人個人でそれぞれ自己課題をきちんと決めていたようで、実習が終わってから一人ひとり学習したことや意見をしっかり持ってみんな良くめあてをもっていったと思う。みんな見る視点が違ったため、話し合いではあちこちから意見が飛びかい、まとまらないくらいだった。しかし、話し合いをしたことで、いろんな考え方、感じ方を知ることができた。

○ チームワークのよさについて

私以外の4人とは、話したこともないほどであったが、集まるうちにみんなと打ちとけることができた。

自分が担当したいクラスを選ぶ時も自分中心の考えでなく譲りあっていった気がした。おかげでスムーズにことが決まり良かった。メンバーの中で班長は決まっていたものの、班長が誰か分からなくなるくらい、お任せきりでなく、班長をサポートし協力していたように思う。

また、みんな元気だったので、場の雰囲気も良かったと思うし、実習も楽しくできたので良かった。(AK)

AKは、自己課題をめぐる、各自の課題が明確になっていて、しかもその課題をもとに実習ができたことから多様な意見がだされ、まとまらないくらい活発な話し合いができた、ということである。他の八つの班も同様な話し合いができたのである。このように活発で、内容のある話し合いのできたことは、実習園において実地に「観察・体験ができた」からであるといえる。いわば、これは一日教育参加の教育効果を如実に

物語るものである。

AKは、チームワークのよさについて考察していることに注目していることである。すなわち、班長を決めるのも、班活動のサポートもスムーズに出来て、GWの雰囲気大変よかった、と考察しているのである。AKと同様の考察をしているものが多く見られる。例えば、YKは、「保育参加」のまとめとして、次のように述べている。

- 集合、行動がともに協力できたと思う。保育活動内では、他のクラスの担当となっている人とかかわりを持っていなかったが、真剣に取り組んでいる姿を何度も目にした。全員、たった一日だけでも園の一員として過すことが出来たということだと思う。(YK)

AKも、YKも、事後指導における自己課題と実習との関係について「一日教育参加」の学習効果のあったことを語っているのである。

あるグループでは、「次の秋祭りの為、雑用を頼まれ、みんなそれぞれ進んで手伝いをして良かった」ともっている。

② 「一日教育参加」で学んだこと

このことについては、初発の一日教育参加という保育実習だけに、学生の新しい発見があり、つまずきがあり、学びがあり、凡そ9時間の長い一日になったのである。それだけに緊張感の連続であり、他に得られない貴重な体験となったと考える。この体験は、学生自身にとって他の学びに比較できない充実したものであったと考えられる。以下、レポートにまとめられた学生の「『一日教育参加』で学んだこと」の事例を提示し考察するものである。

[事例1] RKのレポートの記録

(1) 園児のけんかへの対応

子どものけんかは、何時、何処でおこるか分からないものである。全ての事情を把握できる状態というのは、極めてまれで、ほとんどが「私は悪くない」言い合っている状態である。そんな時、保育士としてどのように対応するのがよいか、今回の教育参加で、そのヒントとなることを体験することが出来た。

この発端は、お茶の順番争いだった。子どもが自分達で解決が出来るのだが、泣き出してしまうと收拾がつかなくなり、子どもの力では、解決は非常に困難となってしまった。

当然、先生として援助をしてあげないといけないのだが、お互いの言い分は、異なっており、正しい状態を聞くことは出来ない。

そのような時は、どちらの味方につくのではなく、どうすればと良かったのかを、子どもが納得できるように教えてあげるのがベストなのだ、考える。

(2) 生物の死

朝園児がザリガニが死んでしまってるのを発見した。先生にそれを報告し先生と一緒に、ザリガニを土に埋めた。園児の一人が「先生、土に埋めたら、アリに食べられちゃうよ？」と先生に聞いていた。先生は「そうするとザリガニさんは、天国に行けるんだよ」と返した。園児は納得できたらしく、先生と一緒にザリガニのお墓の前で祈りを捧げていた。

(3) 私の生涯の仕事

まだ、保育園の先生になりたいのか、幼稚園の先生になりたいのか、考えは決まっていない。子どもに関する仕事をしたい、子どもを将来輝けるものにしようという仕事をしたい、と決意を新たにすることが出来た。これからは自分の適正をはかるためだけでなく、学習にいかせるよう、実習にとりこんでいきたい。(RK)

男子学生のRKは、一日教育参加において二つの出来事に出会い彼なりに「けんかへの対応」そして、「生き物の死との対応」いずれも、戸惑いの中で、自らの知恵を総動員して問題解決をしようとする意向性が見られた。これは、実習ならではのRKの対象との切実な関わり中で生み出された感性・認識・行動が融合し、表出したものと考えている。

このような体験を通して、今、自分の生涯の仕事として「なにをしたいか、どうするのがよいか」迷いつつ、教育参加の体験を学習に生かしたい、と実感したことだけでも教育参加の意味が極めて大きいものであったと、考える。大部分の学生は、RKと同様な戸惑いの中の体験をしているのである。

[事例2] MSのレポートの記録

(1) 発見した乳幼児の心と体

子どもは身の回りのものに対して、興味や好奇心旺盛で、独自の世界を持っているものだと実感した。子どもの遊びの様子を見ていて、1歳児は一つの遊びに没頭するのではなく、集中がすぐにきれてしまうことがわかった。まだ上手にことばを喋るかとはできないけれど、自分の気持

ちを伝えようと表現していることがわかったし、私が言っていることや、保育者の言葉は、子どもはきちんと理解している。保育者の呼びかけにより、「次は食事だから手を洗う」や「次は服を着替えるとき」というように、ある程度生活習慣が身につけていて、自分で行動が出来ていた。衣服の着脱などは、まだ援助が必要だけれど、自分でしようとする様子が見られた。そうやって自分で何かをしているときは、保育者は暖かく見守っていることが大事だし、子どもの喜びと一緒に分かち合うことが大事だと思った。そして、保育者の優しい言葉かけが、子どもの情緒を安定させることは確かだと思われ、子どもが言いたいこと、伝えたいことを理解してあげることが、子どもたちからの信頼へとつながっていくものだと思う。

(2) 一日教育参加で感動したこと

何よりも一番感動したことは、私のことを「先生、先生」と呼んで、一緒に遊んでくれる子がいたことだ。それと、子どもの行動で感動したことが、自分で使っていたおもちゃを他の子に取られそうになったとき、揉めることなく、「いいよ」と貸してあげる優しい子がいたこと。他にも、自分の洋服がどれだかわかるし、「まだ1歳児・・・」と思っていたのをくつがえすような、私自身びっくりさせられることばかりであった。

(3) 私の生涯の仕事

子どもを命を預かる保育士というのは、子どもの健康状態を把握しておくことはもちろんのこと、ひとりひとりに対して目を向けたり、子どもを支える役割があり、とても重要で、やりがいのある職業だとあらためて実感した。実際に保育園や幼稚園の現場にいて、直接子どもと触れてみたり、保育士の仕事の様子を目にしてみないとわからないこともあるし、座学の授業で学んだこと以外に新たに新しい発見もあって、とても良い経験だった。今回の保育教育参加を通して、将来保育士になりたいという気持ちが強くなり、より明確になった。もっと、保育についてきちんと学びたいという、学校の授業に対する意欲も変わったので、夢実現に向けて頑張っていきたい。(MS)

女子学生のMSは、保育園「一日教育参加」において、やさしい眼差しで、しかも鋭い観察眼で、子どもたちの動きを注視しているのである。MSの眼は、耳は、子どもの発することばを、子どものしぐさを見つめてい

るのである。

1歳児は、話し合うことができないけれども、保育士の言葉かけに目を向け、自分の意思を伝えようとする子どもの心的反応が見られる。また、MSは、保育士の呼びかけにも反応する1歳児の一つ一つの行動を観察している。MSは、このような1歳児の動き、一つ一つのふるまいをとらえながら「子どもの生活習慣の形成」や「子どもの情緒的安定」の様態を捉えているのである。

こうした子どもの動き、ふるまいをもたらしている背景を保育士の援助力と結び付けているのである。

また、MSは、一日教育参加における感動体験を、子どもとのかかわりから、捉えているのである。これまで、MSは、子どもの動き、ふるまいから「まだ1歳児・・・」と思っていたが自分で何事しようとすることに感動しているのである。MSは、これまでの自分の子ども観が大きく変容させられたようである。

今回の一日教育参加であったがMSにとっては、自己確認のよい機会になったようである。即ち、座学の授業では得られない「感動体験」「子どもについて、保育士の活動についての実感的認識」が出来たと言うのである。

この一日保育教育参加の実体験は、MSをして『将来保育士になりたい』そのためには『大学の授業に対して意欲的に向かい夢実現したい』というMSの最高の自己実現的欲求を持つに至らしめたのである、と考えるのである。

5 結 論

本報告は、本学の「こども教育学科」新設の初めての試みとして実施した「保育園一日教育参加」における学生の保育士への課題意識や学びの意欲の変容過程その様態を明らかにすることを通して、本学の「こども教育コース」のカリキュラム(保育士養成)の改善視点と方法を明らかにしたことを以下に提示するものである。

併せて、「こども教育コース」の指導体制の確立と学生の保育士としての資質・能力形成の方法との相互補完関係をも検討するものである。

本研究は、上記の3要素、即ち「カリキュラム」「指導体制」「保育士としての資質・能力」の3要素の関係を検討していかなければならない、と考えている。

本研究では、「教育参加」という大学教育の一部を取り出して、3要素の関係を検討することによって、教育の質的転換の手がかりを得たい、と考えているのである。ここでは、検討した所見を以下述べ本報告の結論としたい。

- ① 保育士養成の観点から、保育に関する授業科目は、乳幼児の成長・発達と子どもの見方、関わり

方の実践性・臨床性を加味したものにする必要があると考える。例えば、「乳幼児の発育と保育」「乳幼児発達心理学」「保育園・幼稚園における養護・援助・評価の方法」「乳幼児臨床教育学および乳幼児臨床教育演習」の科目の開設が必要不可欠である。

- ② 指導体制は、講義と関連する実践的アプローチをする専門的研究者・指導者が必要である。
- ③ 学生の園児との関わり方、援助の仕方などの実践力・援助力を身につけるためには、絶え間なく、保育現場での学びの場を拓いていく必要がある。学生は、保育現場との交流・連携をとるためのボランティア活動をする必要がある(既に渋谷区教育委員会においてSAMプランがあるのでそれを活用することもできよう)
- ④ 大学は、3年間(専攻科)修了とともに保育士として保育園での養護と教育の実践的仕事に従事することになる。そのためには、保育士として必要な‘技’と‘心’を実践的に磨くことが大学の使命であり、役割である、と考える。

そのためには、本学の教育参加—保育実習—施設実習への接続・関連に配慮した「実践的理論」を担当する保育実習の専任が必要不可欠である、と考える。

なお、上記の所見に述べたように、今日的な社会的要請課題と乳幼児教育の人間形成の重要性から鑑み、保育者養成の有能な教授組織の確立が必要不可欠である。

謝 辞

本研究は、本学の一年次学生の教育参加できるように渋谷区役所保育課及び九つの区立保育園のご配慮・ご指導をいただいたことによります。このことに対して、深甚なる謝意を申し上げます。

尚 本研究は、佐島が日本教師教育学会研究大会(2009, 9, 29・30)において発表したものに加筆したものである。

(注)

- (1) 菊地紀子 佐島群巳 養護教諭養成における実践的指導力に関する研究(第二報) — 「教育参加」の意味づけ — 教材学研究 2004 p217-220
- (2) 菊地紀子 佐島群巳 養護教諭養成における実践的指導力形成に関する研究 帝京短期大学紀要 2004 p105-132